

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県病虫害防除所長

平成23年度病虫害発生予報第3号（6月）について

このことについて、病虫害発生予報第3号を発表したので送付します。

予報第3号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
水稻	ヒメトビウンカ・縞葉枯病	—	やや多	並
かんきつ	そうか病	並	並	やや多
	ミカンハダニ	少	やや少	やや少
なし	黒星病	並	並	並
ぶどう	黒とう病	並	並	並
かき	炭そ病	並	並	やや多
	フジコナカイガラムシ	並	並	並
いちじく	アザミウマ類	少	やや少	並
果樹共通	カメムシ類	並	並	並
アスパラガス	アザミウマ類	並	並	並
茶	炭そ病	並	やや多	並
	もち病	並	並	やや少
	チャノコカクモンハマキ	並	並	並
	カンザワハダニ	少	少	やや多
	チャノミドリヒメヨコバイ	少	少	少
	チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少	多

* 果樹共通カメムシ類の平年比は、前々年比を示す。

<予想される向こう1か月の天候（平成23年5月28日～6月27日）>

天気は、数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は平年並か高いでしょう。降水量は平年並か多く、日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週目、2週目は平年並でしょう。3週目以降は平年並または高いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

要素	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20	40	40
降水量	20	40	40
日照時間	30	40	30

（福岡管区気象台 平成23年5月27日発表抜粋）

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物－水稲】

普通期水稲

1 ヒメトビウンカ・縞葉枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬に行った小麦での片振り20回すくい取り調査の結果、ヒメトビウンカの発生量は第一世代成幼虫 38.1頭（平年 26.2頭、前年 56.0頭）で、平年よりやや多かった（+）。

イ 越冬世代ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、12.6%（過去8カ年平均 6.8%、前年 9.8%）であった（平成23年度注意報第1号参照）（+）。

(3) 防除上の注意

ア 5月5半旬の小麦におけるすくい取り調査の結果、ヒメトビウンカの中齢幼虫の比率が高かった。

小麦収穫が遅れるほど成虫の比率が高くなり、水稲への飛来量も多くなると考えられるので、小麦の収穫時期が遅くならないよう適期収穫を徹底する。

イ ヒメトビウンカの水稲苗への飛来防止のため、麦類作付ほ場の近くやエノコログサ、イタリアンライグラス等のイネ科植物が繁茂した場所では、育苗を避ける。

前年度、縞葉枯病が多発したほ場では、田植え時期を可能な限り遅らせる（麦収穫後の6月中旬以降）。

ウ ヒメトビウンカに効果のある箱施薬剤を施用する。

箱施薬剤は農薬使用基準（投下薬量）を厳守し、育苗箱全面にむらなく散布する。

散布後は水稲への速やかな吸収を促すため、かん水を行う。

なお、育苗箱で農薬を散布する場合は、育苗箱の下にビニルシート等を敷き、地面への薬剤の浸透防止に努める。

エ ヒメトビウンカ第一世代成虫は、5月下旬から6月上旬にかけて移植後の水稲に飛来するので、早植水稲では移植直後から成虫の発生状況に注意し、発生が多い場合は防除を実施する。

オ 縞葉枯病の発病株を認めたら、直ちに除去する。

【果樹】

1 かんきつそうか病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

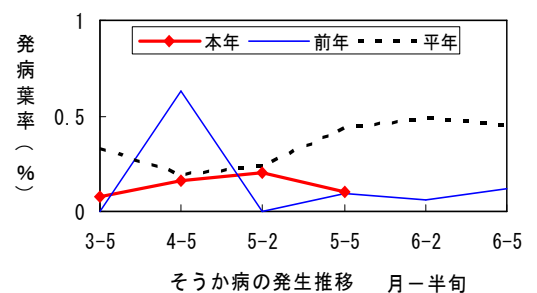
発病葉率 0.1%（平年 0.4%、前年 0.1%）

発生ほ場率 8.3%（平年 31.3%、前年 18.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

伝染源となる罹病葉を除去し、幼果期の防除を徹底する。



2 かんきつのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

寄生葉率 2.8% (平年 12.8%、前年 4.8%)

発生ほ場率 50.0% (平年 59.6%、前年 36.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

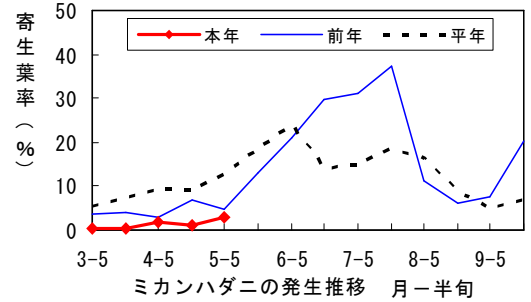
(3) 防除上の注意

ア 高度精製マシン油乳剤は、高密度時には十分な効果が得られないので、発生密度が高くなる前に散布する。

なお、落花期以降にデラン剤を散布した園地は薬害が生じる恐れがあるので使用しない。

イ 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 なし黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

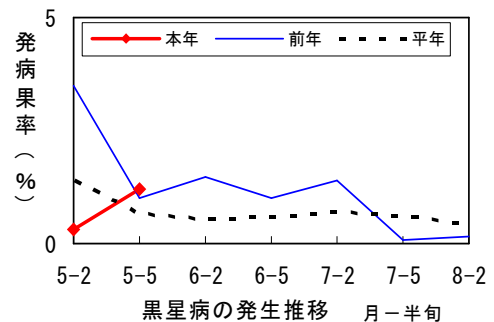
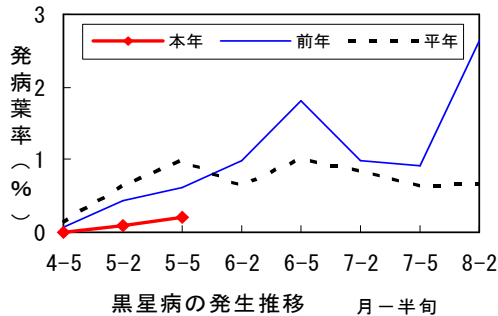
ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 0.2% (平年 1.0%、前年 0.6%)

発生ほ場率 (発病葉) 33.3% (平年 43.9%、前年 50.0%)

発病果率 1.2% (平年 0.7%、前年 1.0%)

発生ほ場率 (発病果) 41.7% (平年 26.1%、前年 36.4%)



イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉や罹病果実は伝染源となるので除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

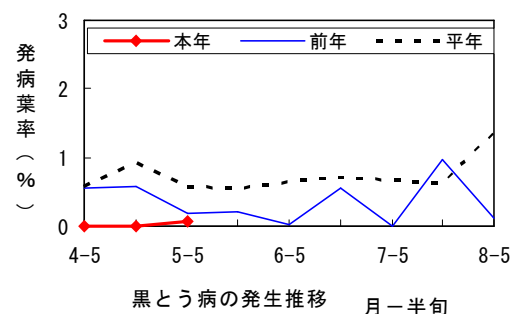
4 ぶどう黒とう病

(1) 予報の内容

発生量：平年、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生は平年並であった(±)。



発病葉率 0.1% (平年 0.6%、前年 0.2%)

発生ほ場率 12.5% (平年 18.8%、前年 9.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

伝染源となる罹病葉及び罹病新梢は除去し、園外に持ち出し処分する。

5 かき炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生は平年並であった(±)。

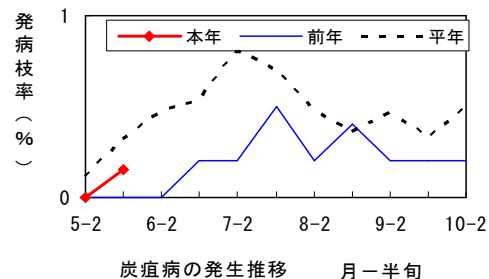
発病枝率 0.2% (平年 0.3%、前年 0%)

発生ほ場率 7.7% (平年 15.9%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる罹病枝及び罹病果は除去し、園外に持ち出し処分する。



6 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生枝率 2.6% (平年 2.4%、前年 1.5%)

発生ほ場率 30.8% (平年 54.3%、前年 41.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 県下2ヶ所(筑紫野市・久留米市)に設置したフェロモン

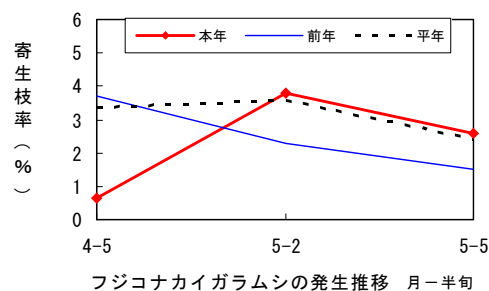
トラップでの雄成虫の誘殺数ピークは、5月10日頃であったため、第1世代幼虫の孵化最盛日は6月10日頃と予想される。

イ 第1世代幼虫の孵化時期は防除効果が高いので、6月上～中旬に10日間隔で2回防除を実施する。

なお、孵化時期は、ほ場によって差があるので、防除前に孵化幼虫の有無を確認する。

ウ 薬剤がかかりにくい場所に寄生しているので、散布むらのないよう丁寧に防除する。

エ 薬剤散布にあたっては、極力、天敵類に影響の少ない薬剤を選択する。



7 いちじくのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 行橋市に設置した誘引剤での5月1～20日の誘殺虫数は、平年より少なかった(－)。

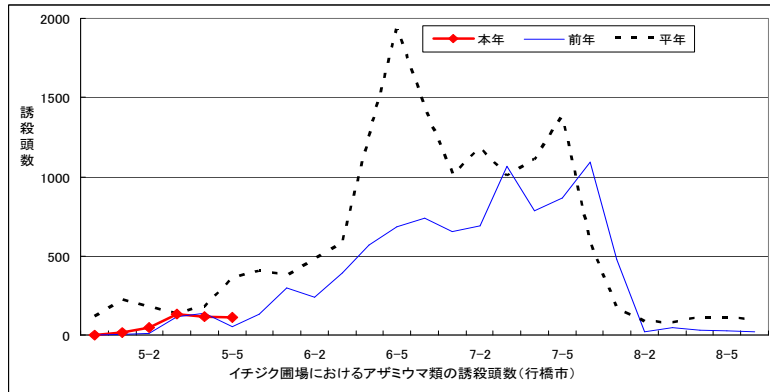
64頭 (平年 150頭、前年 55頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 園地周辺の6～8月に開花する植物でも増殖するので、畦畔等の除草に努める。

イ ほ場で発生が認められたら、定期的に薬剤防除を行う。



8 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年・前々年並

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの1㎡当たり越冬量は県平均で、0.7頭（前年 2.0頭、前々年 1.3頭）で、前年、前々年よりやや少なかった（一）。

イ 5月5半旬までの予察灯の誘殺虫数は、前年・前々年並であった（±）。

（調査地点：筑紫野市）

チャバネアオカメムシ 285頭（前年 387頭、前々年 154頭）

ツヤアオカメムシ 22頭（前年 153頭、前々年 233頭）

（調査地点：八女市）

チャバネアオカメムシ 257頭（前年 96頭、前々年 192頭）

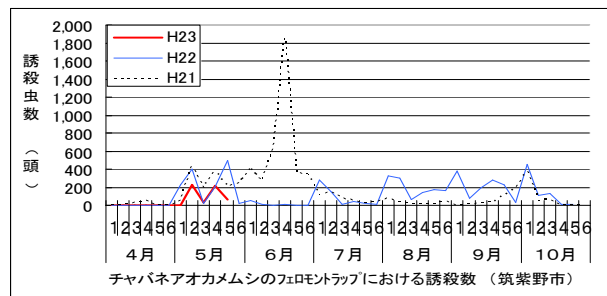
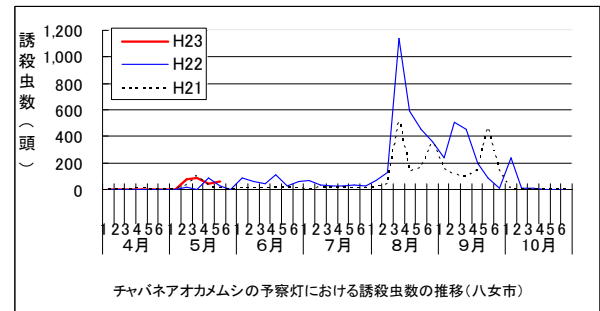
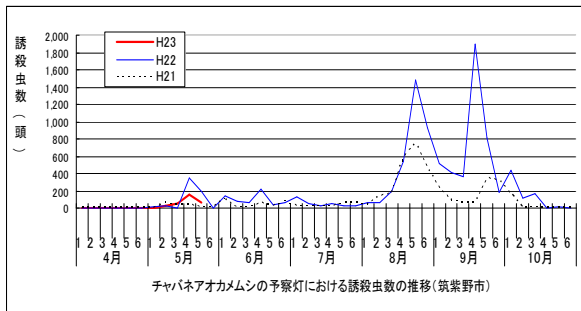
ツヤアオカメムシ 6頭（前年 55頭、前々年 66頭）

ウ 5月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は、前年よりやや少なかった（±）。

（調査地点：筑紫野市）

チャバネアオカメムシ 549頭（前年 871頭、前々年 1,346頭）

ツヤアオカメムシ 17頭（前年 78頭、前々年 439頭）



エ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 常発地では、園内における発生状況の把握に努め、飛来を多く認めたら直ちに防除を行う。

【果樹・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ 黒点病	—	並	並	・伝染源となる枯枝や剪定枝は除去し、園外に持ち出し処分する。
アブラムシ類	少	少	やや多	
なし アブラムシ類	並	並	並	・薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
ハダニ類	少	少	並	
ぶどう べと病	並	やや多	並	・伝染源となる罹病葉は除去し、園外に持ち出し処分する。
かき うどんこ病	並	並	並	・多発園では、8月下旬に炭そ病との同時防除を行う。 ・幼虫は葉と葉が重なった部分やヘタと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤散布に際しては高圧で十分量散布する。
ハマキムシ類	—	並	並	

【野菜】

1 アスパラガスのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5日半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 51.1% (平年 60.7%、前年 61.7%)

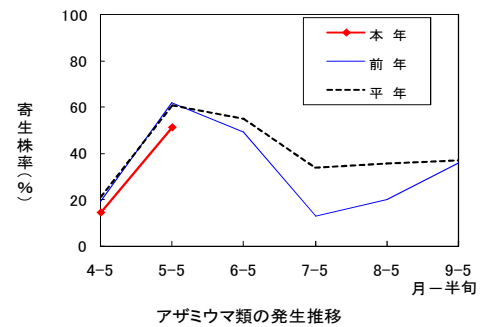
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア ほ場内やほ場周辺の除草を徹底する。

イ 本虫は最初擬葉に発生するが、微小昆虫で見つけにくいいため、白い紙等の上に払い落とし発生量を推定する。

ウ 多発してからでは防除が困難になるので、初期防除を徹底する。



【野菜・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	—	並	並	・擬葉展開後に予防散布を行う。 ・ハウスのつま面を開放し、湿度の低下を図る。

【茶】

1 炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉数 0葉 (平年 0葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0% (平年 0%、前年 0%)

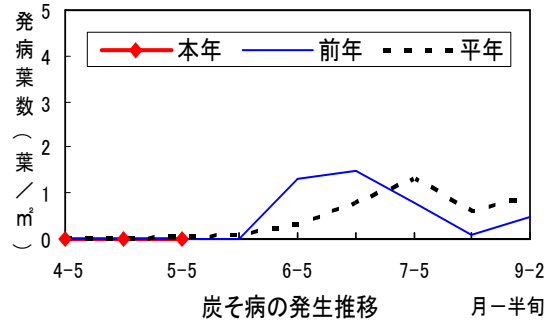
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 一番茶摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

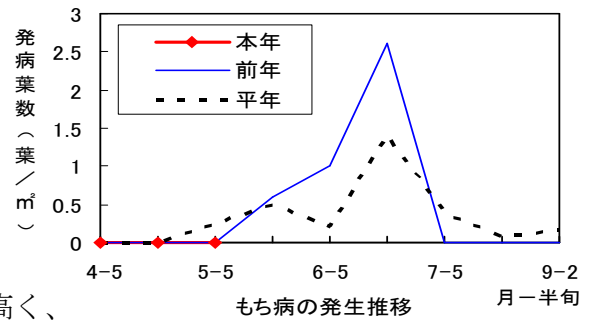
発病葉数 0葉 (平年 0葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0% (平年 0%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 一番茶摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。



3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並。

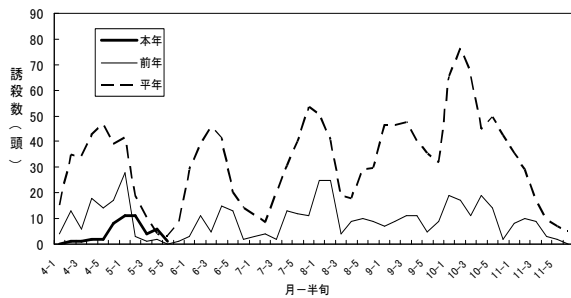
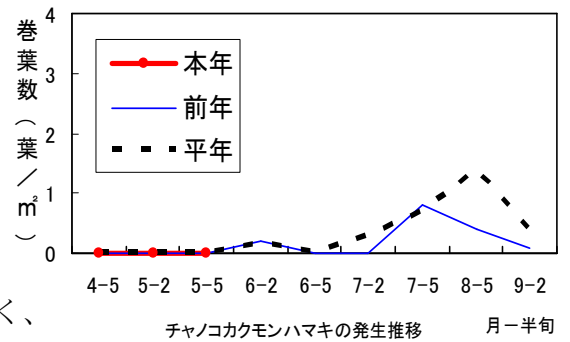
(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

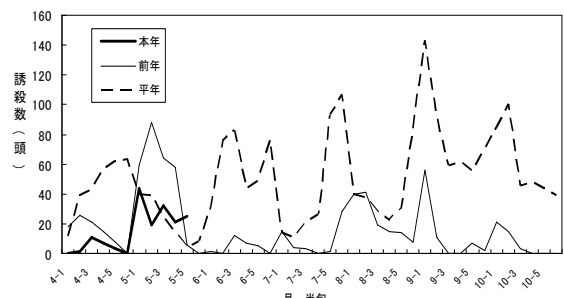
被害葉数 0葉 (平年 0葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0% (平年 0%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。



チャノコカクモンハマキの誘殺数(筑後市)



チャノコカクモンハマキの誘殺数(八女市)

(3) 防除上の注意

ア 第1世代成虫の発蛾最盛期は、6月下旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

4 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年よりやや多。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

寄生葉率 2.2% (平年 3.4%、前年 1.0%)

50葉当たり虫数 1.6頭 (平年 4.7頭、前年 1.1頭)

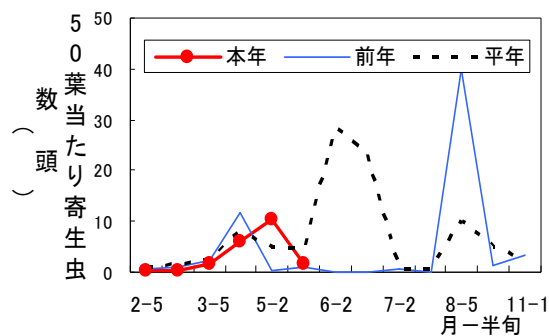
発生ほ場率 47.1% (平年 43.3%、前年 12.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、摘採後、速やかに防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



カンザワハダニの発生推移

5 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少。

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

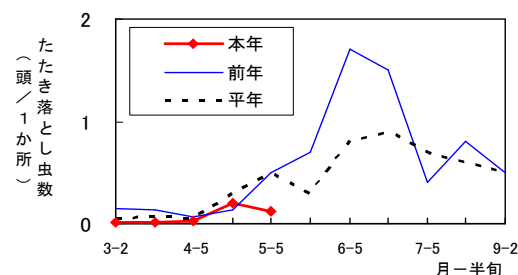
たたき落とし虫数 0.12頭 (平年 0.5頭、前年 0.5頭)

発生ほ場率 17.6% (平年 49.5%、前年 68.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 一番茶摘採後、または二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。



チャノミドリヒメヨコバイの発生推移

6 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より多。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

たたき落とし虫数 5.8頭 (平年 8.2頭、前年 2.3頭)

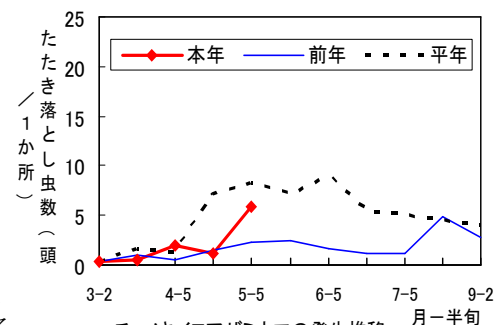
発生ほ場率 58.8% (平年 90.0%、前年 81.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 平坦地では多発している茶園も見られることから、発生状況に注意し、たたき落とし(A4紙上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。



チャノキイロアザミウマの発生推移

農薬の危害防止に努めましょう ～6月から8月は「農薬安全使用運動」期間です～

福岡県では農薬の使用機会が多い6月から8月を「農薬安全使用運動」の実施期間として定め、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮等について周知しています。

また、農薬による事故などを防止することを目的とした安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に、関係機関・団体が一体となって取り組みます。

散布者の安全はもちろん、人畜、隣接作物、河川等への配慮についてご指導よろしく申し上げます。

なお、平成23年2月4日付けの「農林水産省消費安全局長、環境省水・大気環境局長通知」により、農薬として「ツバキ油粕」等を使用することは禁止されていますので、併せてご指導よろしく申し上げます。

農薬安全使用運動重点啓発事項

- ① 農薬ラベル確認の徹底
(適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数)
- ② 散布時には近隣作物や住宅街への飛散防止を徹底
 - ・風、散布方向、散布時間、散布圧に留意
 - ・飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用
 - ・散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意
- ③ 水田除草剤や本田粒剤は、使用後7日間の止水を遵守
 - ・水田において農薬を使用するときは、止水期間を1週間程度とし、落水・かけ流しをしない。
- ④ 散布後は必ず散布器具（タンク、ホース等）を3回洗浄
- ⑤ 防除履歴の正確な記帳
 - ・薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>
電子メール byougaichuboujyo@pref.fukuoka.lg.jp